

古伝武藝形の生成と徳性について —神道夢想流杖術を視点として—

平 木 茂

About generation and moral character of the old record military arts form

Shigeru Hiraki

目次

| | |
|--------------------|-----|
| 序言 | 96 |
| I 古伝武藝各流派 | 96 |
| II 神道夢想流杖術 | 97 |
| III 藝術作品的武藝形 | 100 |
| 結語 | 101 |
| 註 | 104 |
| 参考文献 | 106 |

序言

古伝武藝各流派は、現代におけるも脈々と伝承されている。その伝承様式は、基本的に各流派独自の形の伝承である。

それは、古伝形の模倣・表現・創造への道をとおして本来の形・作品として成立していく。そして、それは藝術作品として歴史を超越している。

それらの古伝武藝は、その生成過程・実践に連動して、精神的内面が構築される。この構築要素の側面に徳性が想定される。

ここでは、その一側面としての徳性について考察したい。

また、古伝武藝形は、各流派の中から神道夢想流杖術に、その視点をあてるものとする。特に当武術は、次のように評価されている。

もともと杖それ自体は、いかめしい武器とは異なって平常私どもがいつも身近に感じている単純で気軽な用具の一つであり、かりに之を手にしても、攻撃的と言うよりは寧ろ護身の気安さがある。だが一旦之が杖道の対象となると、その動きは千変萬化、流動極まりなく、両端の動きは域は遠く或いは近く伸縮自在となって敵の機先を制し、敵の急所を決め、その爽壮とした妙技はまさに文字通り千手観世音の働きにも似たものを思わせる。杖道の持つこのような近代的な明快さ、敏速さ、気軽さには自ずと大衆性、庶民性、親近感が感ぜられ、多くの人々の興味をひきつけずにはおかない。¹

I 古伝武藝各流派

古伝武藝各流派は、いわゆる武藝十八般における、剣術・弓術・馬術・槍・水泳・居合抜き・短刀・十手・手裏剣・吹矢・砲術・薙刀・捕り手・柔・棒・鎖鎌・袖からみ・忍び等の流れを受けて各流派に分化している。²

伝承様式は、歴代の免許皆伝を得た達人によって、主として形目録をもって正伝形が伝承されている。

その内容は、基本的に、第一段階として、古伝形の模倣である。それぞれのわざは、理合いに裏付けられて、極めて合理的な構造を有している。これにより、刃筋・打ち筋・受け筋等の正確な習得が可能である。

第二段階として、その形は、表現の域に立脚する。わざの真なる再現の完成は、精神移入を要する。そこに至る生成の過程に視点をおくことで、対象が豊かに表出され、享受者の積極的な活動が開かれる。自我は、対象を受容し、対象に帰依する体験をつ

うじて、創始者の意図を直感する。

第三段階として、形は、本質の原点から創造されて独自に開花する。形の創始意図・本質に関わることの体験をとおして、形の志向性を体現することになる。形の構造および主題の解釈を得て、形の価値は、更に開示する。形は、解釈を試みさせて、意味の次元に至り、更なる創造へと進展していく。

この道筋で、形は自らに修まる。そして、そこには、妙術に連動する独自の間合いが確立される。

この間合いを自在に構築する度合いは、わざの筋、言わば刃筋の正確さに比例する。この筋の洗練さに欠けると、瞬時における絶妙な間合いの保持は厳しくなる。この意味で、より良い、わざの筋を求めての第一段階の形稽古の繰り返しは重要となる。

そうして、開花されるのは、まさに充実な間の形成である。いわゆる剣術で云うところの一足一刀の間合いであり、二足一刀の間合い等である。これらが、瞬時に確立される。

この事は、日本武道館における日本古武道協会主催の「日本古武道演武大会」においてそれを認めることができる。³

この間合いの実現は、同時に精神的な間合いを有して可能となる。つまり、形における間合いは、精神的距離に及んで精神面の備えを充実させる。この側面を拡充する故に実現される。わざの間合いが精神面の間合いに至る。古伝武藝各流派において、この間合いの取り方が、重要な基本と成る。

II 神道夢想流杖術

古伝武藝各流派のなかに神道夢想流杖術がある。

神道夢想流杖術は、約四百年前に創始された武術である。武器は杖を使う。杖は、長さ四尺二寸一分(128センチ)直径八分(2.6センチ)の檜の丸木と定められている。

武器としての杖は、打ち・突き・当て身・払い等において、左右長短自在に変転させて対応する。稽古は、打太刀との合わせ稽古を加えての総合武術として拡充されている。

その妙技は、極めて流動的で千変万化する。伝書に次の古歌がある。

「突けば槍 払えば長刀 持てば太刀 杖はかくにも 外れざりけり」⁴

創始者は、夢想権之助勝吉であり、伝書によると次のように明示されている。

(略)夢想権之助勝吉は、はじめに天真正伝香取神道流の奥義をきわめ、その免許を受け、更に鹿島直心影流(流祖、松本備前守)を学び「鹿島の太刀、又は一の太刀」と古来から呼称されている剣の極意を授かったと言いつたられている。

(略)当時有名な剣客と数多く試合をして一度も敗れたことがなかったといわれるが、慶長十年頃の六月の或る日、播州明石において宮本武蔵と試合をし、押すことも退くこともできず敗れてしまった。以来、権之助は、諸国を遍歴、艱難辛苦、粉骨の武者修業の末、数年後、筑前の国(福岡県筑紫郡)にいたった。そして太宰府天満宮神域に連なる霊峰、宝満山に登り、神武天皇の御母君にあたる、玉衣姫命を祀る(宝満宮)竈門神社

に祈願すること三七日、至誠通神、満願の夜、夢の中に童子が現れ「丸木をもって水月を知れ」と神託を授かった。権之助は(略)剣によって得た真理をすべてのものに応用し種々創意工夫し(略)槍、薙刀、太刀、体術等の武術の特長を総合的にとり入れ、杖術を編み出し、遂に宮本武蔵の十字留を破ったと伝えられている。その後、権之助は黒田藩(福岡)に召しかかえられ、藩士の指導に当たり、十数人の師範家を起こして盛大に

指南せしめた。以来この杖術は藩外不出の御留の武術として継承されてきた。(略)⁵

ここにおける術は、次の目録にのもとに形が現され、歴代の免許皆伝者において振興されている。

神道夢想流杖術目録

表業 太刀落
 鏑割
 著杖
 引サケ
 左貫
 右貫
 霞
 物見
 笠ノ下
 一礼
 寝屋ノ内
 細道

中段 一力
押詰
亂留
後杖
待車
間込
切懸
真進
雷打
横切留
拂留
青眼

影 太刀落
鏢割
著杖
引サケ
左貫
右貫
霞
物見
笠ノ下
一礼
寢屋ノ内
細道

五月雨 一文字
十文字
二刀小太刀落
ミジン
眼ツブシ

奥伝 先勝
突出
打付
小手留
引捨

五夢想の杖(極意秘伝)

闇打
夢枕
村雲
稲妻
導母⁶

以上のように、表業・中段・影・五月雨・奥伝・五夢想の杖(極意秘伝)へと進展していく。つまり、表業にはじまり、極意秘伝に至ることにおいて、形の姿は表の域から奥の域に超越する。

さらに、この超越を示唆するものとも読める次の古歌が同じく伝承されている。

「傷つけず 人をこらして 戒しむる 教へは杖の 外にやはある」⁷

この歌の域においては、もはや、わざは無と化し、超越されている。精神の域へと展開されている。

この志向性は、古伝武藝各流派の目録・兵法書等の伝書において、多く認められる。新免二刀流の始祖である宮本武蔵の「兵法三十五箇条」においても、同様の域・空間が認められる。三十五条の末文に記されている。

一 万理一空の事万理一空の所、書きあらはしがたく候へば、おのずから御工夫なさるべきものなり、⁸

また、武蔵は、次の歌を残している。

「敵もなく われもなぎさの海士小船 漕ぎゆく先は 波のまにまに」⁹

武蔵も、まさに、同様の境地で、相対の域を脱している。わざは超越されて精神の域に至っている。わざの稽古にはじまり、わざを自らの内に修める。そして、それは、まさに無への志向性とわざを修める内面性との合致という特徴が析出される。

Ⅲ 藝術作品的武藝形

古伝武藝における形は、いわゆる藝術作品に位置するものである。作品には、その内容において精神的側面に裏付けられた形が開示されている。

つまり、神道夢想流杖術における表業・「太刀落」<図1>は、太刀を繰りつける時点で相手の面を一気に突くことが可能である。しかし、形においては、あえて、その拳に及ばない構造と成っている。制するに留めて、さらに次々と留めていく。同様に、次の「鑢割」<図2>においても太刀をかわして、右小手を打つ時点で、面を打つことで相対は決せられるが制するに留めている。このように、極地まで留めた後に決するわざを繰り出す。ここには、言わば余白が漸次展開されていくかの様相を呈している。古伝武藝の多くの形は、その構造を有している。

また、この作品の精神的側面は、達人による絵画においても認められる。

武蔵の作品『枯木鳴鶉図』<図3>は、枯れ木に、モズが描かれている。枝の中ほどに、モズに対して尺取虫<図4>が表されている。モズの眼光の鋭さ<図5>が冴えている。この画面からは、さまざまなことが読み取れるが、ここにも、同様の構造の解釈を成立させることが可能である。

いずれにせよ総体的に本質のみが象徴的に際立っている。

つまり、本質以外は、余白・余地である。まさに、そこには、その余白には、精神的余地としての雄大な精神世界が開示されていると言えるものである。

むすびに

古伝武藝形には、いわゆる正しい刃筋かどうかの稽古をつうじて、正しい道筋・正道感の礎が確立していく。また、その結果として、

絶妙な間合いの展開が可能となる。

この間合いは、さらに精神的備えに連動していく。

さらに、形の極みに至っては、形は超越され無と化して行く。何事にもとらわれなない精神的な無の域への志向が生成される。

それは、形の構造においても現されている。つまり、芸術作品としての形の構造は、余白に充ちている。

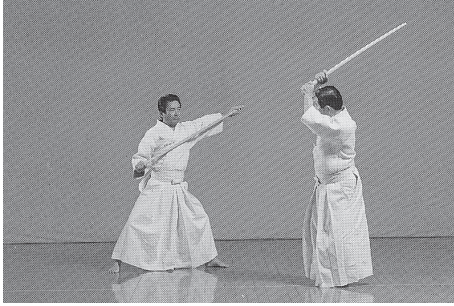
これらの間・無・余白等は、単なる虚としての無ではない。むしろpositiveな無である。無が漲っており、充たされて拡充された無への展開である。

古伝武藝の形の生成への極みにおいては、徳性の一側面が育まれ表出する。つまり、その徳性は、ゆとりの境地が開花されての精神平静への道の体得と云えるものであろう。ここに、古伝武藝は不滅の武術として永遠性を有していくことに成る。

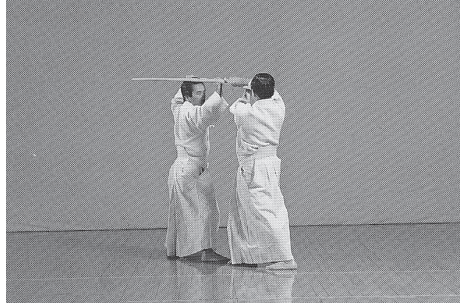
図

<図1> 表業「太刀落」(乙藤市蔵監修・松井健二『神道夢想流杖術』壮神社。1994,p.51.)
(部分)

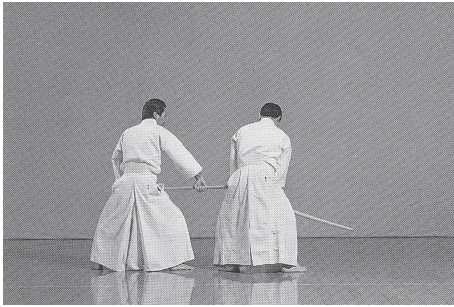
⑤



⑥



⑦



[⑦の裏側]



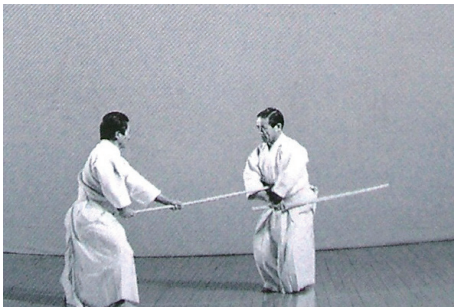
<図2> 表業「鐔割」(同書。p.54.)
(部分)②



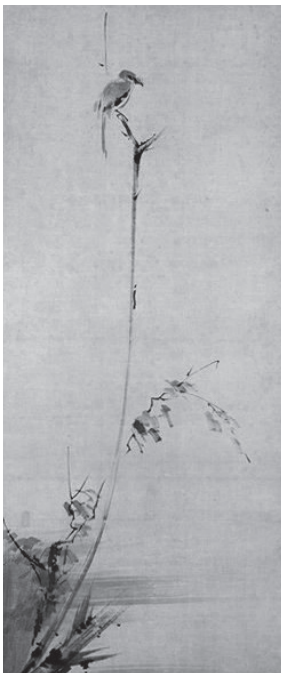
③



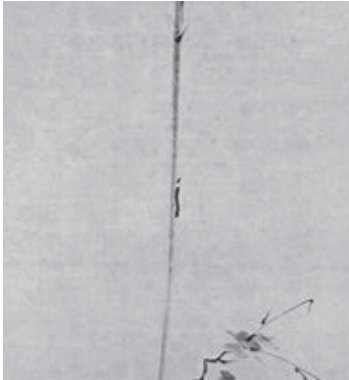
④



<図3> 宮本二天筆『枯木鳴鴉図』久保惣記念美術館。江戸時代一七世紀。紙本墨画。
126.0×54.5（東京都国立博物館編集『特別展・日本の水墨画』東京美術。1986.



<図4> 同。(部分)



<図5> 同。(部分)



註

¹ 錬武館編『杖道教範』京浜光学工業株式会社。1967.P7.

² 日本古武道協会編『日本古武道総覧』島津書房。1989.PP33-177.において、次の各流派が案内されている。

[柔術・体術]

高木流柔術・起倒流柔術・諸賞流和・心月夢想柳流武術・自剛天真流柔術・関口新心流柔術・竹内流柔術・天神真楊流柔術(戸張)・天神真楊流柔術(久保田)・柳心介胃流柔術・日下捕手開山竹内流柔術・本體楊心流柔術・気楽流柔術・大東流合気柔術(武田時宗)・大東流合気柔術(琢磨会)・神道楊心流柔術・渋川流柔術・為我流派勝新流柔術・武田流合気之術・柳生心眼流体術・長尾流体術

[劍術]

小野派一刀流劍術・一刀流溝口派劍術・北辰一刀流劍術・中西派一刀流劍術・一刀正伝無刀流劍術・甲源一刀流劍術・鹿島新当流劍術・示現流劍術・鞍馬流劍術・柳生心陰流兵法劍術・タイ捨流劍法・兵法二天一流劍術(今井正之)・兵法二天一流劍術(小松信夫)・野田派二天一流・神道無念流劍術・心形刀流劍術・卜伝流劍術・天然理心流劍術・天真正伝香取神道流劍術・雖井蛙流平法・駒川改心流劍術・野太刀自顕流劍術・馬庭念流劍術・深甚流

[居合術・拔刀術]

立身流・貫心流居合術・田宮流居合術・林崎夢想流居合術・伯耆流居合術・水鷗流劍法居合・無外流居合兵道・無雙直傳英信流居合術・信拔流劍法居合術・円心流居合据物・関口流拔刀術・新田宮流拔刀術・鐘捲流拔刀術・初実劍理方一流・興神流居合術

[槍術]

佐分利流槍術・宝蔵院流高田派槍術・尾張貫流槍術

[杖・棒術]

神道夢想流杖術・無比無敵流杖術・無辺流棒術・竹生島流棒術

[薙刀術]

天道流薙刀術・直心陰流薙刀術・心流薙刀術・戸田派武甲流薙刀術

[空手・琉球古武術]

和道流空手道・柔術拳法・糸州流空手道・琉球古武術・本部御殿手古武術

[鎖鎌術]

二刀神影流鎖鎌・直猶心流鎖鎌術・心鏡流草鎌

[砲術]

陽流砲術・森重流砲術・関流砲術

[弓術]

小笠原流弓馬術・武田流騎射流鎬馬

[その他武術]

荒木流拳法・柳生心眼流兵法・荒木流軍用小具足・根岸流手裏劍術・一角流十手術・九鬼神流武術

[水術]

岩倉流水術・山内流水術・小掘流踏水術・水府流水術

- 3 当大会は、次の趣旨のもとに開催されている。「我が国の長い歴史と伝統を持つ古武道の技と心を広く一般に紹介し理解を得るため、全国各地に伝わる古武道の中から、厳選した流派による演武会を開催し、文化遺産である古武道の保存伝承に寄与するものである。」
- 4 清水隆次監修・中嶋浅吉・神之田常盛『神道夢想流・杖道教範』日貿出版。1976.
p.20.
- 5 同書p.9.
- 6 同書p.19.
- 7 同書p.20.
- 8 西山松之助・渡辺一郎・郡司正勝『近世藝術論』岩波書店。1972.p.400.
- 9 森川哲郎『日本武士道史』日本文芸社。1978.p.132.

＜ 参考文献 ＞

- 錬武館編『杖道教範』京浜光学工業株式会社。1967.
- 西山松之助・渡辺一郎・郡司正勝『近世藝術論』岩波書店。1972.
- Trevor Pryce Leggett『紳士道と武士道』サイマル出版会。1973.
- 清水隆次監修・中嶋浅吉・神之田常盛『神道夢想流・杖道教範』日貿出版。1976.
- 森川哲郎『日本武士道史』日本文芸社。1978.
- 神子侃『五輪書』徳間書店。1978.
- 東京都国立博物館編集『特別展・日本の水墨画』東京美術。1986.
- 日本古武道協会編『日本古武道総覧』島津書房。1989.
- Herbert Read滝口修造訳『藝術の意味』みすず書房。1990.
- 乙藤市蔵監修・松井健二『神道夢想流杖術』壮神社。1994.
- 拙稿『神道夢想流杖術とシェイクスピア —秘められた志向性と超越性について—』
国士館大学武徳紀要第18号。2002.
- 拙稿『時空間芸術の展開 —神道夢想流杖術と風姿花伝—』国士館大学武徳紀要第19
号。2003.
- 拙稿『日本文化の本質的表現について —龍造形を視点として—』国士館大学武徳紀
要第22号。2006.
- 拙稿『教育理念を基軸とした学び —創立者作詞による学園歌への視座—』国士館大
学武徳紀要第26号。2010.
- 拙稿『日本古傳藝術表現について —共通性と多様性—』国士館大学武徳紀要第28号。
2012.
- 拙稿『美術様式の変遷および「近代」(モダニズム)の美術について』国士館大学武徳紀
要第29号。2013.